



# ダイダラボッチ

## はじめに

古来、日本には山や川や湖を造った巨人伝説が伝えられてきました。古くは風土記にも現れ、『常陸国風土記』では、現在の茨城県水戸市塩崎町にある大串貝塚の由来として、「大昔、巨人がいた。岡の上にながら手が海まで届き、ハマグリをさらうほど大きな体で、巨人の食べた貝は積もって岡になった」とあります。

『常陸国風土記』では、「各地を巡って託賀郡にやってきた巨人が、他の土地は天が低くていつも屈んで歩いてたが、この地は高くてまっすぐ立って歩ける、と言った。だから託賀(高)郡といい、巨人の足跡は数々の沼となった」など、現在の兵庫県多可郡の地名由来を説明する伝承となっています。

## 巨人の名前

これら風土記では、巨人のことを「上古有人體極長大」とか、「昔在大

て相模野の原ぢうを捜したが、どうしても無いので残念でたまらず、ぢんだら(地団駄)を踏んだ足跡が、この二つの沼だ」といいます。

## 水戸の千波湖

茨城県の水戸駅から近い千波湖は、一周約3kmと大きいですが、やはりダイダラボッチの足跡という伝説があります。また、湖畔に建てられた「ダイダラボッチの伝説」の碑には、「ダイダラボッチは現在の内原町大足に住んでいた。村が朝房山のために日陰になり、村人の困っているのを見たダイダラボッチは、山を村の北方に移してしまつた。ところが、その跡に水がたまって洪水になつたため、指で小川をつくつて水を流し、その下流に掘つた沼が千波湖だと



千波湖(茨城県水戸市)

人」などと、固有名を用いずに大きな人がいたと述べるにすぎませんが、いつの頃からか名前が付けられ、そ



河口湖畔から見た富士山(山梨県富士河口湖町)

う」と書かれており、同じダイダラボッチによる湖の造成伝説でも、まったく内容の異なるものが伝わっているようです。

## 代田橋

柳田國男によれば、東京は「日本の巨人伝説の、一箇の中心地と云ふことが出来る。我々の前任者は、大昔會てこの都の青空を、南北東西に一跨ぎに跨いで、歩み去つた巨人のあることを想像して居た」のであり、多くの伝承が報告され、例えばデイトスポットとして有名な井の頭恩賜公園の井の頭池もダイダラボッチの足跡だといえます。

世田谷区の代田は、ダイダラボッチに由来する地名だとされ、そこにあつた代田橋という玉川上水に架けられていた橋は、ダイダラボッチが架けたと伝えられています。幅の狭い玉川上水の橋なので、富士山のような巨大な山を造る巨人人にしては、ずいぶん小さな仕事ですが、この地にダイダラボッチの足跡と伝えられる窪地があつたことから、このような伝説が生まれたと思われれます。

## ダイダラボッチの足跡

柳田國男は、代田村の足跡を実際に見ていており、『ダイダラボッチの足跡』という小文に次

の多くは「ダイダラボッチ」、「ダイダラボウ」、「デーラポッチ」などとされています。

「大人弥五郎」などと、他の名前で呼んだ地域もありますが、もつとも一般的なのは「ダイダラボッチ」、「デーラ」、「デエダラ」などの音のよく似た語と、「ポッチ」や「ボウ」といった僧侶や山伏を連想させる語を組み合わせたものとなります。

この名前について、民俗学者の柳田國男は「何時から又如何なる事由の下に、我々の巨人をダイダラボッチ、若くは之に近い名をもつて呼び始めたか」と、由来不明ながらも「柳亭種彦の用捨箱には、大太発意は即ち一寸法師の反対で、是も大男をひやかした名だろうと言っている」などと古今の説を紹介しています。

## 富士山を造る

ダイダラボッチの伝承は、富士山を造るといふ壮大なものから、橋を

の様に記しています。「ダイダの橋から東南へ五六町、其頃はまだ畠中であつた道路の左手に接して、長さ約百間もあるかと思ふ右片足の跡が一つ、爪先あがり土深く踏み付けてある。と言つてもよいやうな窪地があつた。内側は竹と杉若木の泥植で、水が流れると見えて中央が葉研になつて居り、踵の處まで下ると僅かな平地に、小さな堂が建つて其傍に湧き水の池があつた」。

その後、柳田は代田村の隣の駒沢村にも足を運び、もう一つの足跡も見物して「代田と駒澤とは足の向いた方が一致せず、おまけに皆東京を後にして居るが、之に由つて巨人の通つた路筋を考へて見ることは出来ぬ。地下水の露頭の為に土を流した場處が、通例斯ういふ足形窪を作るものならば、武蔵野は水源が西北に在る故に、ダイダラボッチはいつも海の方又は大川の方から、奥地に向いて闊歩したことになるわけである」。

柳田は、武蔵野台地からの地下水が露出したことから、このような足型の窪地ができたと考えています。長沢利明氏の『東京のダイダラボッチ』によれば、このような散在する足跡群を、一連のものとして捉え巨人の進路を説明しようとする伝承が各地で聞かれたとしており、また同論文の「東京のダイダラボッチ伝説

一覧」から足跡の伝説は、約6割と多数を占めることがわかります。

かけたという身近なものまで幅広く存在します。

富士山に関連した伝説をいくつか見てみると、「富士山を造るために、土を取つた跡が甲府盆地となつた、あるいは琵琶湖、東京湾となつた」、「大昔、ダイダラボッチが富士の山を背負おうとして、足を踏ん張つた時の足跡が相模野にある大沼となつた。また、この原に植物の藤が無いのは、ダイダラボッチが背負繩にするつもりで藤ヅルを得られなかつた因縁で、今でも成長しない」などがあります。

足跡が湖沼になつたというのも、ダイダラボッチ伝説の典型です。例えば「横浜線の淵野辺停車場から見える所に、一つの窪地があつて水ある時には之を鹿沼と謂つて居る。それから東へ寄つて是も鉄道のすぐ傍らに菖蒲沼があり、二つの沼の距離は約四町である。デエラポッチは富士山を背負はうとして、藤蔓を求め

## おわりに

私事になりますが、もう十年以上前に岐阜城を訪れたことがあります。岐阜城の再建天守は、標高329mの小山の上であり、そこまで登ると大変見晴らしがよいのですが、濃尾平野を延々と回り流れる木曾三川などの川々を見て、これはまさに蛇だなど感じたことがあります。蛇は水神であり、河川の主とされていますが、魚などの水生動物でなく、なぜ蛇なのだろうという疑問が氷解したように思えました。

巨人伝説の成立を考えた場合、例えば風土記の昔から建物もまばらな近世において、岐阜城の小山のような山々に登り、広々とした平野を見渡した人々は、そこに散在する足跡のような窪地や湖沼から、足裏を大地にめり込ませながら大股で歩く巨人の姿を容易に想像することができたのではないのでしょうか。

ダイダラボッチの「ダイダラ」は、音韻からタタラ製鉄の「タタラ」につながり、鍛冶技術者集団と深い関係があつた山岳修験者に由来するといふ説もあります。近世以前は現在のように登山を楽しむ人々はいなかつた時代ですので、巨人の姿を見て、それを平地に暮らす人々に伝えたのは、そうした山々を拠点とする修験者たちだったのかもしれない。

(文：江口知秀)



千波湖畔の「ダイダラボッチの伝説」の碑(茨城県水戸市)